

黒田麴廬の業績及其著書

龜 田 次 郎

一

幕末開國前後から明治維新までの間に、時勢の急に應じ幾多の洋學者が輩出して、當時の學界に活躍し貢獻したが、其等の業績は今日湮滅に歸せんとし、全く不聞に終らんとしてゐるのも少くない様である。今自分が茲に述べようとする黒田麴廬翁の業績も其一である。自分は先年來其闡明に勉めてゐたが、最近新村博士も亦翁の事蹟について調査を遂げられ、文學士中村直勝氏は翁の後裔の居所を見出され、滋賀縣史編纂主任牧野信之助氏は自分の調査に際し多大の便宜を與へられたのである。今自分は以上三氏の助力と自分の蒐集した資料とに依て、此一篇を公にするに至つたのである。尙不備の箇所多いのは勿論であるが、この幕末から明治初期までの間、斯學に貢獻した不聞學者の業績の一斑を世に紹介すれば望は足るのである。完備した詳傳は、後人の攷究に俟つ次第である。只此蕪雜の一篇が、多少參考にならば

幸である。

二

苟も多少我開國文明史に意を注げる者には、幕末慶應年間に出た西洋事情の著者福澤諭吉翁の名を知らない人は無からうが、同じ慶應末年即明治元年に出た同書の増補校正者黒田麴廬翁の名をすら知らない人は又多からうとおもふ。此麴廬翁の事蹟は、古くは嘉永五年に出来た西洋學家譯述目錄に見えてゐる丈で、近くは翁に師事した杉浦重剛翁の知己八賢（大正三年四月二十八日刊）中に追懷の一章があり、最近には大町桂月猪狩史山二氏共著杉浦重剛先生（大正十三年六月四日刊）中に同意の一章がある丈位である。今自分には此等所收の事實と自分の蒐集した資料とに依て、先づ其經歷を述べよう。

〔西洋學家譯述目錄や平田好著懷郷坐談所載の略傳に見える如く、麴廬翁は名は行、或は行元、字は大道、通稱行次郎といつて、麴廬は其號である。父は膳所藩の儒者で、通稱五平次、名は善、或は扶善、號梁洲といつた。文政十年三月に生れ、家學をこの父に承けて、父命に依て蘭學を兼修し、緒方洪庵や伊東玄朴の門に遊んだのである。博學強記を以て世に聞えてゐた。壯年以後の履歷は、其自記の由緒書（黒田家所藏に見えて居る。今冗を厭はず其全文を次に抄録する。）

七代 黒田行次郎行

弘化三丙午年閏五月十一日御目見江仰付依同年七月二十三日大阪儒者藤澤東暎方江儒學爲修行罷越申度段願之通御聽届被仰出

弘化四丁未年正月十五日米九俵被下置御中小姓組被罷出候

同月二十一日京都儒者岡内六藏方江學問修行ニ罷越申度段願之通御聽届被仰出候

令徳院様御代

嘉永元戊申年八月十二日江戸表丹羽左京太夫様御家來安積雄助方江學文爲修行

罷越申度旨願之通御聽届被仰出候

同四辛亥年正月十九日米拾五俵ニ御直被下置候

同年三月西洋炮術蘭書和解兼學被仰付候

同五壬子年五月御歸城之節御道中御本陣番被仰付候

同年七月三日米拾八俵被下置御馬廻組道義堂學文師範役頭加讀御家譜方服忌令掛リ兼帶被仰付候

同年十二月學文格別出精ニ付麻御上下一卷銀五枚被下置候

嘉永六癸丑年六月二十日蘭書翻譯滿業ニ付麻御上下一卷銀二枚被下置候

安政二乙卯年正月十五日具足差出候ニ付金五百疋爲御褒美被下置候

同三丙辰年四月九日蘭學師範被仰付候

當御代(康讓公)

安政四丁巳年四月八日親五平次爲家督六拾石被下置勤方は迄之通被仰付候

文久二庚戌年四月十八日御役儀御免御馬廻格被仰付候

同年五月十五日開成所出役教授手傳御差出被成候様被仰渡候ニ付江戸表江罷

下開成所江罷出候様被仰付候依之從公邊出役中金拾兩拾五人扶持被下置候

元治元子年正月十三日御馬廻組歸席西洋學師範被仰付開成所出役中爲役金七

兩宛被下置候

慶應元丑年十一月二十五日依御內願開成所出役御免被仰出候依之膳所表江之

御暇被下置候

慶應元丑年十二月二十三日道義堂學問師範役頭御家譜方服忌令掛兼帶被仰付

候

同二寅年十一月七日西洋小銃隊軍制取調加談被仰付候

同年十一月二十一日拾石御加増都合七拾石被下置御鎗奉行格被仰付候

慶應三丁卯年三月

本國伊勢生國近江

黒田行次郎印花押

當卯四十一歳

これで翁の中年時代の事が明かるのである。父の事蹟經歷も、此由緒書六代の處に、

六代 實、森喜右衛門三男

黒田五平次善

初名五三郎

として詳細に記してあるが、餘り必要がないから省略する。只父の歿年について、

安政四年閏五月二十四日病死仕候

とあるので明かるが、翁の家督相續は上記の「由緒書」所載と對照すると、父の歿前三ヶ月の四月八日であることが知れるのである。父病氣重態の爲めに生前に相續した様である。又翁の初めて蘭學を修めた時代は、上記の「由緒書」では明かでないが、此「由緒書」所載以前であつた様である。それは西暦千七百六十八年（我明和六年）出版英國龍動欲^{コウ}頼^{ヘン}軒^{セン}特烈機名^{テツレツキナ}。烏^ウ般^{ハン}怯^{セツ}勒^{レツ}膚^フ姓^{セイ}撰^{セン}和蘭欲^{コウ}頼^{ヘン}禮^{レイ}由^ユ羅^ロ敷^フ斯^ス譯^{ヤシ}ナチ^{ナチ}ユル^{ユル}キ^キユン^{ユン}デ^デを

黒田麴廬の業績及其著書

翁が和譯して「初學窮理抄」と題した寫本一卷（黒田家所藏）の題言中に、

嚮ニ庭訓ヲ奉シ西洋ノ譯法ヲ浪華緒方氏ニ學ビ其樓ニ寓スルヲ既ニ裴葛再代ユ。
其學ノ初メ實ニ大行王屋ニ登ル如シ。頃ロ粗其徑路ヲエテ。少シク。修シ易キ
ヲ覺フ。今茲乙巳之夏。樓上ノ瓦熱。殆ンド身ヲ熬ル如シ。同學皆暑ヲ避テ四
散ス。余亦裝ヲ束テ。橋梓ニ歸リ居ルヲ數旬。乃藩醫山元氏所藏ノナチュルキ
ユンデヲ借來テ。且讀シ且譯ス。（下略）

乙巳八月

黒田行謹誌

と見え、又此書の表紙裏に記してある文中に、

乙巳九月四日浪華ニ趣トバ、伏見京橋ニ至リ航ヲ備フ。舟人人ヲ招テ急ニ纜ヲ
解ズ。因テ橋上ニ徘徊シ、欄ニ憑リ西眺ス。（下略）

とあるのから推算すると、弘化二年以前即ち上記「由緒書」記事以前の年代である。即ち乙巳は翁十九歳の干支で、弘化二年に當るからである。翁は巳に丁年以前に於て蘭學に通じてゐた事がおもひ知られるのである。茲に特筆しておかねばならぬのは、翁が文久二年五月幕命によつて「蕃書調所」翌年開成所と改稱に出仕した事である。此は翁の蘭學に秀でて居つた爲めの拔擢であるのは勿論だが、又一方には上記「由緒

書所見の如く、翁は已に嘉永元年に江戸表遊學をして居るし「古賀西使日記」(大日本古文書幕末外國關係文書附錄一〇頁二一六)にも嘉永六年十一月十六日の條に、

夜膳所黒田行次郎來候、餉糟、湖産也

といふ記事がある。古賀謹一郎が魯使ブーチャチン提督に應接するため長崎に下向する折である。此頃から古賀氏とは知己であることがわかる。兩人の交誼は、已に古くからあつたのでこの任用があつたものとおもはれる。この事は經歷中特記に値するものである。現に當時此出仕に關する書類が、黒田家に遺つてゐる。今其文を下に示さう。

黒田行次郎

右勤候内爲御手當拾五人扶持並一ケ年金拾兩被下候

右之通周防守殿被仰渡候に付申渡之

一戌五月七日板倉周防守様御退出江御呼出ニ付運平罷出候處公用人を以左之御書付御渡有之先御請立歸り口上に而勤之

卷上

本多主膳正江

藝文

八八

本多主膳正家來

黑田行次郎

右蕃書調所出役教授手傳可被申付候尤古賀謹一郎淺野伊賀守妻木田宮可被承合候

五月八日板倉周防守様江福田雄八郎差出之翌九日御同所様へ御呼出ニ付石川運平罷出候處御書被添公用人を以被爲御渡候御内慮伺書寫左之通

主膳正様御家來黑田行次郎義蕃書調所出役教授手傳被仰付候ニ付主膳正様御禮勤之義如何可被爲御心得候哉且行次郎主膳正様御在所に被差置候者に付早速可被爲御呼出候得共御禮勤之義如何爲仕可申候哉此段各々様迄御内慮奉伺候様被仰付候以上

五月八日

本多主膳正様御家來

福田雄八郎

御書取

主膳正様は御家中水野出羽守へ使者差出行次郎義は出府の上老中水野出羽守へ相廻候様可仕候事

これで見ると、翁は急速出府して一週間後に任命された様である。後四年を経て、慶應元年十一月に辭職歸藩し、同年末から藩費遵義堂督學となつて漢學洋學を擔當して藩の子弟を教育されたのである。杉浦重剛翁などはこの時代の學生で、漢學の外に蘭英佛語、洋算理化學天文學などを教へられた、又後年藩の貢進生に推選されて上京されたのも翁の力に依つたのである。當時の狀況は「知己八賢」や「杉浦重剛先生」の二書に詳しく記してある。翁の洋學殊に語學方面は蘭學は固より英、佛、獨、梵の諸語に及び、其研究の博く深いことは今日の學者達に比べて段違ひであると杉浦翁も述べられてゐる。中々の博學であつた様である。蘭學以外の此等諸國語は、誰に師事せられたか不明であるが、自分の推測では蘭學から出て獨習であつたとおもふ。餘程語學の天才であつたと見える。翁はかくして藩の子弟を教育されてゐたが、王政復古後明治二年の暮に藩費に寄宿舎が出来、それが皇學、漢學、洋學の三つに分れて居た。翁は漢學兼洋學教授の上席を勤められたのである。この藩費も種々内部に紛争が起つたので、翌三年五月に廢校となつて仕舞つたのである。これ以後翁は家塾を設けて蘭學を教へて居られたのである。明治四年廢藩置縣後の消息は明かでないが、多分閑地にあつて翻譯や著述に専ら從事されてゐた様である。翁の著作に此

時代のものが多いからの推測である。此四五年閑居後、明治七八年頃から、翁は新に活動されたのである。京都東本願寺では、六年八月新に翻譯局、後八年七月譯文局と改稱を設置し、舊幕の才學成島柳北氏を聘して局長とし、石川舜台、渥美契縁二氏を初め、宗内の學僧を局員とし、種々の事業をさせたのである。栗原重冬の「散斯克單語篇」二冊（明治九年六月刊）、散斯克小文典三冊（明治十年十二月刊）の如きは當時の出版である。此の際翁も亦此局の囑託となられたのである。翁の起用は、郷里の知人唯傳寺住職の紹介であつたと稱せられる。これは表面の事であるとおもふ。局長成島氏は、舊幕の儒者であり、且明治初年歐米に漫遊した人である。翁は以前蕃書調所出仕時代からの知合でもあつたらう。殊に當代の博言學者たる翁が有爲の材を抱きながら、空しく京都と程近い膳所に閑居してゐるのを知つたので、茲に翁を起用したのであらうとおもふ。翁が此時代に種々の翻譯をされたが、就中其最異彩を放つてゐる「利巖薛陀」二卷三十七冊「榜葛刺文典」一卷十二冊の如きは、亦此間の一大業績である。翁の著述は後に述べる。翁は茲に三四年勤めたが、生來の身體虛弱のため、遂に退職するに至つた様である。其消息は、在職中當局へ差出した下記の願書で明かる。

一、私儀今般譯文局出仕ノ命ヲ辱フシ感佩ノ至ニ奉存候然ル處生質虛弱多病ノ上

眩暈の宿疾有之從來閑散ノ職ニノミ罷在リ未タ日參繁務之地ヲ經歷仕ラズ候間奉職ノ儀甚心配仕候得共己ニ數年勤メ來リ候譯業ノ儀強テ出勤可仕候唯出局ノ日數參退ノ時刻等不出來ノ節ハ少シク御宥恕被成下度此段奉願候也

明治十年八月十三日

黒田行元 印

教育副長渥美契縁殿代理

教育課四等出仕白川慈辯殿

(朱書)聞濟候事

但病氣等ニテ出勤不致時ハ定規之通其都度可届出事

明治十年九月十八日

教育課長渥美契縁代理

教育課五級出仕

細川千巖 印

翁は退職後暫く靜養されてゐたが、傍郷里の子弟に漢學や英學などを教へられて居つた。十三年三月には、縣令籠手田安定氏に印度學興立につき願書を提出されたが、其結果はうまく行かなかつた。其願書も黒田家に現存してゐる。翌十四年から

十五年まで二ケ年間、滋賀縣師範學校に聘せられ、漢學教授を囑託され、育英に従事された。校長は土屋政朝、片山綱兩氏の時代ある。爾後居を蒲生郡八幡町に移して茲に退栖し、漢學教授をして其晩年を送られたが、二十五年十二月十四日享年六十六で歿せられた。遺骨は馬場驛附近にある岡山共同墓地先塋の處へ埋めた。墓碑は先代累代之墓とある。後裔は現に滋賀郡石山村字北大路に住せられ、嗣子梁太郎氏は健在である。他に女子二人あつたのである。

翁の著書は非常に多い。已に嘉永五年の自序ある穗亭主人輯「西洋學家譯述目錄」には、

*漂荒紀事 (二卷、文明治五年刊)

博物地理篇

同 分析篇

の三部が載せられてゐる。嘉永五年は翁二十六歳の時である。又慶應四年六月刊行した翁の校正増補和解「西洋事情附録」の卷末には、父梁洲の著述書目と併録して、

*漂荒紀事 活版 三卷

西洋百官志 十卷

天學概論 圖入 五卷

兵制沿革論 二卷

*天象新說 圖入 三卷

泰西楊世夫傳 一卷

海外奇觀 五卷

梵西同軌 一卷

*地學大旨 圖入 五卷

*西洋星象名義解 一卷

*永海航記 一卷

燃犀新錄 一卷

の十二部が載せられてある。慶應四年は翁四十二歳の時である。又「知己八賢」や「杉浦重剛先生」に翁の著書の主要なものとして、

*新曆明解

*線形圖解

*萬國商賈往來 (明治六年刊)

黒田麴廬の業績及其著書

*西洋料理新書（明治七年刊）

*魯敏孫漂航紀事

増補校正西洋事情（慶應四年刊）

薛陀經翻譯

一 錫蘭史

*梵字書

語學推原

學術韻府

*梵英文典

散斯克體梵籙

萬國語原學大意

の十四部を掲げてある。此記事は多分現今黒田家に保存されてゐるものを掲げられた様におもはれる。去六月十九日自分が新村博士、牧野君と同道で訪問した際に調査したものは、大抵この中にあるものである。其折の調査で前掲以外のものとしては、

梵天聖語アリアン系 一鋪

平等時常用時比較表 一枚(版木共)

*達通館配合西洋曆 一枚(版木共)

*改正商賣往來 (明治六年刊)

佛語字彙原書書寫

*西洋星象名義解

初學窮理抄 Volks-Naturkunde 寫

*榜葛刺文典(表題印度方言語學)

*利慶薛陀三喜多引

があつた。尙同家に「著述目錄」と題した翁自筆の半紙十四丁の一綴がある。これは、翁晩年の所記とおもはれる。翁の業績を知る一資料である。今其全文を下に示さう。卷首に草稿譲り渡し條規として、次の文がある。

第一則

一著述之品請合草稿譲り渡しの約束相濟作料不殘前以請取たる者は期限一日も後れず多分日限より早く相渡すべし手附無之又は入札之品は本より一定なきゆへ

他の高札へ相渡すべく又譲り渡しは常に草稿と引替への事

第二則

一翻譯並に外著述共作料は常に一枚貳拾五錢を定價とし時の様子により相談の上これを増減すべし猶先例表を見合すべし

第三則

一主顧にて一部か二部手附中入又々取頼候分は作料格別引下げ可申事

第四則

一日限有之者は一週^七二週^{十四}を以相數へ申べし見本を持ち歸るに一週なれば本書の作料十分一の償金を預け置き申べし又刻成後製本相贈り可申事

○

〔拂〕(米印中月) 此分已ニ譲ル印

〔刻成〕(同前) 此分已ニ上木

と規定が掲げられて、其次に著述目録が列擧されて居る。

編輯器解^{縣令}〔拂〕

萬國地名往來〔拂〕

〔刻成〕

港繁昌記 林 拂 刻成 (明治六年刊)

公私用文章 石田 拂 刻成

養雞新說 堀江 拂

*料理新書 石田 拂 刻成

民間天學問答 石田 拂

公法譯義 福井 拂

政醫新書 百二十枚

*新曆明解 石田 拂 刻成

傷訟律書 林 拂

開化新說 石田 拂 刻成 (明治六年刊)

世界都府盡 石田 拂 刻成

*天象新說 事始

養蠶新說 石田 拂 刻成

長生祕錄

西史撮要 石田 拂

黒田麴廬の業績及其著書

藝文

*萬國商賣往來 林 拂 刻成

鑛山新書 三十枚

改正諸職往來 田 拂 刻成

說教獨學 三十枚

讀譯祕訣 四十枚

原被兩告解

說教會通 前 四十枚 拂

博物新志 四十枚

西洋百官志略

說教題解 一名 二十八題新解 百十枚

詞訟新則

開拓必讀 北海新誌 三十枚

商家經濟集 五十枚

化學諺解 三冊ニテ百枚

開化職業往來 二十二枚

萬國立教大意 三十枚

拂刻成

*地學大旨 百五十枚

續博物新志 三十枚

開闢新說 三十枚

料理新書 二篇
三篇

世界晚近形勢 四十枚

小學讀式新志 三十枚

客商開運錄 百二十枚

*星象名義解 二十五枚

新曆明解 後編 五十枚

*永海航記 四十枚

朧月 三十枚

萬國經濟新集 四十枚

西洋酒造新書 五十枚

改正消息往來 二十二枚

拂刻成

黒田麴虚の業績及其著書

藝文

西洋花火新書 四十枚

神教祕要 三十枚

西洋悉皆法 二十二枚

石炭探法 三十枚

天學大旨 百二十枚

修身の燈 三十枚

毛織新書 二十五枚

天學事始 百三十枚

西洋性理新說 四十枚

開化初步 三十三枚

改正庭訓往來 五十五枚

開化諸禮心得 三十枚

終身世渡りの舵 三十枚

畢氏經濟新書 二百枚

製革新書 七十枚

拂

西洋百將傳 五十枚

*改正 商賣往來

拂

刻成

鐵道新說

電信機說

官途字引

萬國地名字引

學政新說

東西駢事

政教新論

拂

歸農新論

心理二理新說

心理祕要

國法大意

國法要旨

關邪新說

黒田麴廬の業績及其著書

心理辨解

郵便日用文 拂*線形圖解 拂政體新論 百二十枚 拂 刻成小學教授圖解 拂世界地圖用法 拂 刻成開化文章往來 拂 刻成*英梵文典 四百枚 拂

*利巖吠陀 (終り)

としてある。以上の著書の大部分は翻譯物であるが、其中刊行されたものは割合に少く、大部分は原稿の儘で、出版されずに仕舞つた様である。刊行されたもので自分の知つて居るのは、各書目の條下に括弧中に一寸記しておいた。脱漏は無論あるであらうと信ずる。前掲著述書目は多少重複したものもあるし、又同書異名のものである。自分の管見の及ぶ所は*を標記しておいた。尙遺漏があるのであらう。今其主要なものについて其内容の梗概を順次示さう。

一、漂荒紀事

此書については、已に新村博士が『典籍叢談』(大正十四年九月二十五日刊)に述べられてゐるから、それを茲に轉載することゝした。

○漂荒紀事 二冊 嘉永初年頃譯

出陳した本は予の所藏二冊本であるが、末に嘉永四年の寫としてある。譯者の名も序跋等もない。彰考館書目刊本八四一頁及渡邊修二郎氏の本では三冊とある。岡崎桂一郎氏の藏本には六冊とある。今は文明源流叢書第一に收めてあつて六卷である。明治五年第一卷のみを刊行したこと後に掲げる通りである。嘉永五年の自序ある穗亭主人の西洋學家譯述目錄刊本又文明源流叢書第一に重刊に由ると漂荒紀事は寫本三とあつて、黒田麴廬といふ人の譯たることが知られる。(二三—五—二三六頁)

とあり、又此解題の次に、

○魯敏孫全傳 一冊 明治五年刊

前掲の漂荒紀事の第一卷を、齋藤了庵譯と標して刊行したもので木板である。高田義甫校とあり、又高田子正の題辭がある。これらの人々の事は一向知らぬ。鐵線書屋

藏版東京書肆香芸堂發兌とある。この刊書以後、明治十六年に出た井上勤の譯した魯敏孫漂流記一冊は、英書から直接に譯した本の最初であらうかと思ふが、前記の譯本も、次に掲げんとする別譯本も、共に蘭書からの重譯であつたのである。(二三八頁)とある。要するに魯敏孫漂流記の譯本である。後者が齋藤了庵譯となつて刊行された事情及此人の事蹟は未詳である。

二、萬國商賣往來 一冊

此は明治六年二月出版で表題は「商業必讀萬國商賣往來」となつてゐる。黒田行元、関横田重冬、編、松川半山畫である。京都藤井孫兵衛出版である。商賣往來に眞似たものである。

三、西洋料理新書 一冊

明治七年出版で、京都文求堂から發行されてゐる。西洋料理について少しく記したもので、譯本である。

四、増補和解西洋事情 四冊

此は慶應二年刊行の福澤諭吉翁の西洋事情を校正したもので、慶應四年六月出版で、京都吉野屋仁兵衛外四名の發行である。美濃紙半切の小本で、附録一卷は西洋

事情の増補である。世人福澤翁の著を知つて此書を知る者少い様である。著作中注意すべきものである。

五、梵天聖語アリアン系 一鋪

此は印歐語の系統圖である。翁の梵語研究から出来たものゝ様である。當時の作として珍とするに足る。原稿の儘である。

六、平等時常用時比較表 一鋪

達通館配合西洋曆 一鋪

此は西洋曆早見表といふべきもので、後者は安政五年曆である。翁の推算、原田重好、澤島方矩、校川村敏修刻とある。維新前のものとしては、異とすべきである。兩者の版本も遺つてゐる。

〔知己八賢〕及〔杉浦重剛先生〕の中に、

それから先生は木板一枚刷の曆を出版して人々に分たれた。内容は普通の曆に、いつ花が咲くなどといふことを加へたもので、門人の土肥好敏君陸軍中佐トナリ日清戦争後死亡が木板を彫るのに器用であつて之を作つたのである。而して曆の終には先生の名と我々門弟四人ばかりの名を列べて掲げられた。予の如きは自分の名が板木に上

つたのは、之を始めとする。矢張り先生の奨励法の一つであつたらうと思ふとあるのは、此後者を示したものであらうか。然し時代が合はぬ。杉浦重剛翁の入門は慶應二年であるから、或は此類の暦を爾後屢刻成されたので杉浦翁入門當時にも亦刻成されたのではなからうか。現存のものは其舊いものであるのではなからうかとおもふ。序にいつておく。

七、改正商賣往來 一冊

此は上記商賣往來の改正版の様である。黒田行元先生著、山口松雲先生書とあつて、明治六年七月の自序、九月官許、十二月發行で京都石田忠兵衛出版である。

八、佛語字彙原書寫 一冊

此は原書の梵語字書の譯本である。

九、榜葛刺文典 十九冊

此は、次記の利巖薛陀三喜多引と共に翁の業績中最異彩を放つものである。本書の草稿ともいふべきものは「梵字書」と題し、其成稿が本書である。西暦千八百六十四年版の英國晩近顯任教科大教頭ウ・エチース氏著榜葛刺語法書を翻譯したものである。黒田家所藏本は「印度方今語學」或は「梵英文典」と題して、全九冊内第二冊が缺

けてゐるが、大谷大學所藏本は「榜葛刺文典」と題して、十二冊數千丁の大部である。表紙に八年九月十日校合濟と朱書し、石川の捺印がある。翻譯局及其後身譯文局に於ける翁の業績の一で、捺印から見ても、石川舜台師の檢閲を経たものであることがわかる。下記「利變薛陀三喜多引」と共に先年大谷大學開催の展覽會に陳列されて、學者の驚嘆した所のものである。

十、利變薛陀三喜多引 三十七冊

此は前者と併せて特筆すべきものである。黒田家所藏本は、全二十九冊の内十一冊以下十七冊迄と十九、二十三兩冊と九冊缺けて二十冊ある。大谷大學所藏本は、表題「利變薛陀」とあつて内題は上記の通である。全二卷三十七冊で第一卷二十八冊第二卷九冊であるが、中第一卷第一冊以下十五冊迄缺けてゐる。第二卷の八、九兩冊は十三行罫紙で、柱に譯文局とあるから、前書と殆んど時を同じくし、矢張翁の翻譯局及其後身譯文局出仕時代の翻譯である。原書は西曆千八百五十四年倫敦版英國華華偉爾孫譯を更に重譯したものである。數千丁の大冊である。

十一、萬國港繁昌記 三冊

此書については、新村博士の『典籍叢談』に記されてあるから、下に轉載する。

○萬國港繁昌記 上卷 一冊

明治六年の題辭及び發行である。三冊のうち上卷に龍動の記がある。編者は膳所の黒田行元で、挿畫は大阪の松川半山である。(中略)この書は江戸繁昌記その他の地方の繁昌記流行の餘風を承けて出來たものだ。(三二頁)

以上十一種十二部の大要を述べた。尙この外にも述べておくべきものもあるが、さまではおもつて、此丈に止めたのである。

翁に『課業日乗』と題した日記が三十七冊ある。黒田家に保存されて居る。安政元年から明治二十五年の歿年までのものである。即ち翁の二十八歳以後の日記である。これを見ると、翁の壯年以後の經歷がよくわかるのである。翁の萬事緻密であつた事が推知さるる。又翁は非常な藏書家であつた様である。『安政三年丙辰八月十日行誌藏書目』一卷が存在してゐる。翁三十歳の時のものである。然し此藏書の大部分は最早散逸して仕舞つてゐる。其小部分丈が遺存されてゐる。嗣子梁太郎氏は此の上の散逸を恐れ、現存の書籍全部を纏めて、京大圖書館へ寄贈される事にせられた。誠に結構な事である。

翁の逸話もあるが、それは「知己八賢」や「杉浦重剛先生」に見えてゐるから、それに譲つて茲には凡て省略する。

三

以上述べた所で麴廬翁の業績及其著書の一斑がわかつたであらう。翁は幼より博覽強記で、非常に緻密な語學者であつたことが推知されるのである。學は和漢洋を兼ね、就中外國語に至つては數ヶ國語に通達されてゐた。幕府及其藩の學賢に出仕し、育英に従事し、幕末から明治初年までの間に或は教育に或は著作に於て、學界に貢獻された所大なるものがあつた。殊に其梵語學の翻譯は我邦斯界に特筆大書すべき業績を遺され、吾々後進をして驚嘆に堪へざらしめるものがある。尤も其著作の大多數は翻譯であり、且今日から見れば通俗平易の嫌はあるが、此は時勢の然らしめた所で敢て咎むべきではなからうとおもふ。翁は斯る學者でありながら榮達を得ず、晩年は不遇で世に不聞であつたのは誠に痛惜に堪へぬ次第である。これは何に因るか。翁は小藩の出身であり、且明治維新後は藩閥跋扈の世である。爲めに舊幕時代に聊重用された翁も、遂に志を伸べる機を得なかつたのである。若し翁にして藩閥の後援があつたならば、大に天下に雄飛し、名聲を博し、非常に榮達されたであ

らうと考へる。由來學者には運不運がある。立派な大學者にして後世永く葬られて、不聞に終る者があり、又一方には餘り左したる學者でも無いのに、生前から虚名を博してゐる者も多くある。然し時は正しい批判者である。時代は眞價を定める。

翁歿して茲に三十有餘年、其業績も湮沒に歸せんとしてゐたのである。今や後進の自分が會、翁の偉業を追懷して、蕪文を草し、此不聞學者の事蹟を世に公にするに至つた。若し幸に其功績の幾分でも明かにするを得ば、本懷の至である。遺漏定めて多からう。詳細な傳記は是を後人に委ねる。終に臨んで自分が本篇を草するに當つて、直接間接に資料蒐集に援助を與へられた翁の嗣子黒田梁太郎氏夫妻、新村博士、中村學士、牧野縣史編纂主任の厚意に對し、感謝の意を表する。(大正十五年九月二十四日稿)